

# 明治大学の教育

Education of  
Meiji  
University

## 情報コミュニケーション学部 新カリキュラム — 「必修科目の撤廃」と「モジュール」制

### はじめに — 背景説明

2004年に開設された情報コミュニケーション学部は、早いもので本年度で13周年を迎えます。「人と社会が見えてくる」をキャッチフレーズに、問題発見・解決型の学域横断的な研究・教育を実践する社会科学系学部として斯界に一定の地位を築きつつあると自負しているのですが、ここまでの道程は平坦であるどころか、紆余曲折と試行錯誤の連続だった、というのが学部立ち上げから関わった教員の一人である筆者の偽らざる実感です。

学部の理念や方針を巡って侃々諤々の議論を戦わす域を超えて、怒声が飛び交い格闘手前までいったことすらあります。しかし筆者はそうした経験も新しいことをはじめるとしても伴う「産みの苦しみ」のひとつだったと振り返って思います。

明治大学の100分授業体制と軌を一にして2017年度から新たに開始される情報コミュニケーション学部の新カリキュラムは、私たちのこれまでのこうした取り組みが結晶化したものであり、本学部の教育実践の現時点における成果報

### PROFILE



大黒 岳彦 Takchiko Daikoku  
情報コミュニケーション学部長

大黒 岳彦(だいく たけひこ)  
1961年香川県生まれ。東京大学教養学部を卒業後、東京大学理学系大学院(科学史科学基礎論専攻)博士課程単位取得退学。1992年日本放送協会に入局(番組制作ディレクター)。退職後、東京大学大学院学際情報学府にて博士課程単位取得退学。

現在、明治大学情報コミュニケーション学部教授。専門は哲学・情報社会論。著書『〈メディア〉の哲学—ルーマン社会システム論の射程と限界』(NTT出版)、『情報社会の〈哲学〉—グーグル・ビッグデータ・人工知能』(勁草書房)など

### 告でもありません。 「教養」とは何か？

筆者がオープンキャンパスや出張講義で受験生やご父母に本学部を説明する際に常に使うのは「情報社会時代の教養教育」というフレーズです。この場合「情報社会時代の…」という形容句がミソで、このことばによって従前のいわゆる「教養教育」との差別化を図っているわけです。いわゆる「教養教育」というのは、その後に「専門教育」が続くことを前提に「薄く広く」「前段的基礎」を築くことが意図されています。ですが、情報社会では「教養」も異なるかたちを取るのではないのでしょうか？ 現在、イギリスのEU離脱(Brexit)やアメリカのトランプ政権下での政策などに顕著にみられる「グローバリゼーション下の孤立主義」「ビットコイン」という新たな貨幣形態、スノーデン事件が象徴する「監視」の新段階、ロボットや人工知能の日常生活への組み込み、といったこれまでにない事態や現象が生じています。

既存の定型化され、タコツボ化した知は無効です。これまでに積み上げられてきた個々の知を総動員して、問題に際してその都度、知の枠組みを機動的に組み上げるほか手立てはありません。この時既存の「知」は問題解決にとつての「資源」となります。こうした「リソース化した知」を組み立て、運用して柔軟に課題解決にあたることのできるスキルの養成を、私たちは「情報社会時代の教養教育」と呼びたいのです。従来の「教養教育」が過去志向であったのに対し、私たちのそれは未来志向である、といってもいいでしょう。

### 「学際性」とは何か？

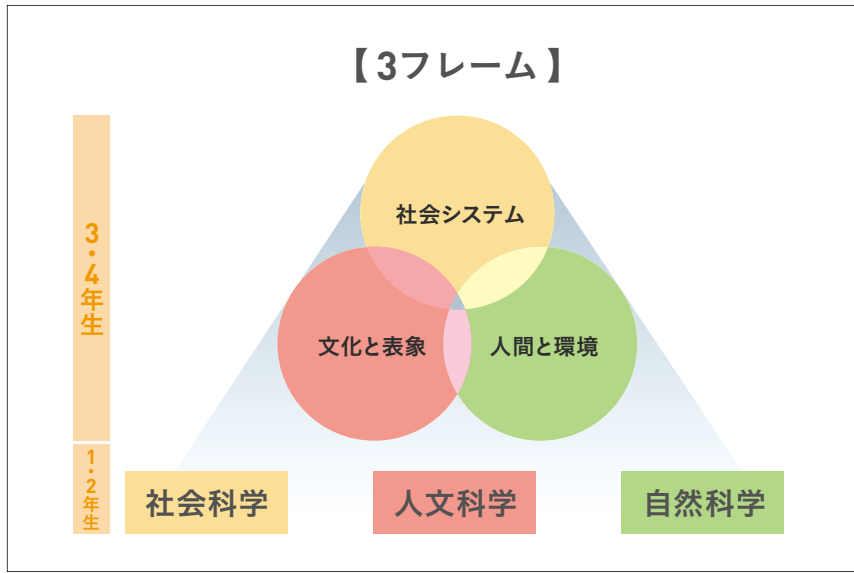
このような新しい教養教育においては「学際性」も新しい意味を持つてきます。これまでの「学際」は「専門教育」をすでに修めた者たちを糾合して立ち上げるものでした。ですが、新しい教養教育においては「太初に学際ありき」です。さまざまな分野の「知」は問題を立て、それを解決するための「リソース」なので、これは当然です。問題を、さま

ざまな学問のアンクルから眺め、さまざまな学問の言葉で記述し、さまざまな学問の方法を駆使していく中で、その学問固有の意義に学生たちが徐々に気付いていくことを私たちは期待しています。つまり「専門性」とはここでは、教養教育における「気付き」の「結果」であって、従来のような教養教育の「前提」ではなくなるわけです。

### Creation & Expression ~ 「アクティブ・ラーニング」

現在、文部科学省の主導で「アクティブ・ラーニング」が大学教育で大流行です。ですが、本学部では、同じ言葉こそ使っていませんが現在の流行に先駆けるかたちで「創造と表現」(Creation & Expression)のスローガンのもと、実質的に「アクティブ・ラーニング」に取り組んできています。すなわち、作品や成果のアウトプットを前提に学生たちが主体的に何事かに取り組み、教師はあくまでもそのサポートに徹する、というワークショップ型の授業科目です。

これまで本学部が設置していた「クリ



ル」(履修モデル)を80ほど作成しました。例えば「ダイバーシティとともに働く」という問題にアプローチするためには、1・2年次の「社会科学」フレーム

以上のようなポリシーを具体的な制度に落とし込んだものが、今回実施する「モジュール」制(正式には「3フレーム・科目プール制」、下記参照)です。「モジュール」制の骨子は、カリキュラムを学生の主体性に委ねることにあります。筆者はこれを「カリキュラムのカスタマイズ」と呼んでいます。

### 結論としての「モジュール」制

以上のようなポリシーを具体的な制度に落とし込んだものが、今回実施する「モジュール」制(正式には「3フレーム・科目プール制」、下記参照)です。「モジュール」制の骨子は、カリキュラムを学生の主体性に委ねることにあります。筆者はこれを「カリキュラムのカスタマイズ」と呼んでいます。

「自己統治と主体性」こそが「アクティ

新しいカリキュラムでは学生の主体性を保障し履修の自由度を高めることを目標としました。必修科目は、全専任教員がオムニバス形式で授業を行う情報コミュニケーション学入門A・Bの4単位のみとしています。選択必修科目は3フレームの中に分類した専門科目群(約190科目)から64単位、外国語科目群から10単位(英語6単位、未習外国語4単位)、研究方法・表現実践科目群(約50科目)から10単位取得することを卒業要件としています。この卒業要件はかなり緩いものであり、学生個々が、それぞれの興味・関心に応じて自由に科目を力

## 自由度の高いカリキュラムとゼミ

から組織論・社会学を、3・4年次では、「社会システム」フレームから、ジェンダー・マネジメントを選択する、といった感じです。「3フレーム」は、学生が科目履修の選択を行う上での目安であり、

私たち情報コミュニケーション学部の教員は、学生にその主体性を存分に発揮し、なおかつ情報コミュニケーション部の学際性や科目ごとの関連性を理解してもらいたい、との思いから「3フレーム・科目プール制」を設けました。1・2年次では伝統的学問体系に準拠した3フレーム(社会科学・人文学・自然科学)を、3・4年次にはより学際性を意識した3フレーム(社会システム・文化と表象・人間と環境)をそれぞれ置き、その中に専門科目を配してあります。ま

## 「3フレーム・科目プール制」 新カリキュラムの核となる

「必修科目の撤廃」によって学生には大幅な「自由」が与えられますが、それは同時に「自己統治と主体性」を学生に求めることでもあるのです。そしてこの

スタマイズすることを可能としています。また、情報コミュニケーション学部はゼミに力を入れています。とくに1・2年次のゼミは専任教員のみが担当することとし、学生の履修計画の相談にのれる体制としています。

**PROFILE**

**山崎 浩二**  
Koji Yamazaki  
情報コミュニケーション学部  
教務主任

「履修モジュール」も指標にすぎません。学生は、これらを参照することで「問題を発見し解決していく」4年間を主体的に楽しむことができるはずですよ。

た、自己の問題関心を充足するためには、この3フレームの中からのどのような専門科目を履修すればよいのか、という学生の疑問に対処するために「履修モジュ

**PROFILE**

**須田 努**  
Tsutomu Suda  
情報コミュニケーション学部  
情報コミュニケーション学科長

ブ・ラーニング」の本義であるとともに明治大学のキャッチフレーズである「個性を強くする」ことの真髄でもあると筆者は信じています。